日本の幼児教育の今日的課題

南　信子

日本における幼児教育は、最近実にさまざまな形で行なわれている。よび方も、保育、幼児教育、就学前教育等と、まちまちの異なったいい方をし、その内容も、幼稚園教育、保育所の保育とわけられ、更に、ドロンコ教育、ハダカ教育、英語教育、スパルタ教育、通信教育等、多種多様な形で行なわれているのが実状である。その他、体育教室、音楽教室等、家庭以外の幼児を対象とする教育にかかわる施設は花ざかりといってよい。

又過去三十年来論じられてきた、自由保育、一斉保育にも、いまだに混乱が見られる上に、最近は又、オープン・システム、ゴール・フリーエデュケーション、モンテッソリー法等の影響を受けてか、たてわり保育といったよび方による方法も一部で盛んとなり、現場にある保育者も又混迷の中にあるのではないかと思う。

一方、最近特に多く発見されてきた障害をもつ幼児の為の教育も、普通児と共に教育するのがよいか、特別な施設の中で考えるべきであるのか、いずれにせよ、社会のそのような要求にも応じなければならない実状である。

更に幼児の教育は、次の段階の小学校教育との関連において考えるべきであるが、幼稚園、保育所から小学校に対する要求、小学校から幼児教育に対する要求として、種々のことがあげられるだけで、一貫した教育体制の中で取扱うことをせず、その為の適切な方策が講じられていないように思われる。

このような、多くの幼児教育にかかわる課題と、多様化の中で、日本の幼児教育が、その道をふみあやまることがないようにと願う心は切実である。現代は、民族も個人も、世界をはなれて生きることは不可能であり、画一化されることも又不可避である。真の自由の中で、主体的にしかも確信をもって歩むことが迫られているといえよう。私はその意味で、幼児教育が正しい方向をめざすために、次の二つの点を指摘、強調したいと思う。それは私自身の反省でもある。その

一つは、

㈠　その教育は、ほんとうに、ひとりひとりの子どもを中心に考えられているのか、という視点である。

漢字教育、英語教育というが、子どもが中心であるというよりも、漢字や英語が中心に考えられているようにも思われる。ハダカ教育、ドロンコ教育、スパルタ教育も、或特定の人の教育観が中心にあるのではないかと、考えたくなることも多い。更に園児獲得の為、地域の社会、父兄等の要求に左右され、それに迎合し、その園の特色をもたせるに都合のよい方針や内容を取りいれているのではないかと思い、暗たんとした思いにさせられるのである。どこまでも、幼児教育は、ひとりひとりの子どもを中心として、その全人的、総合的な成長発達が考えられなければならない。

㈡　今一つの視点は、目標が、幼児教育の本質にそって、はっきりかかげられているのか、どうかである。

多種多様な方法で行なわれるとしても、何よりも重点をおくべき、優先すべき、又中心におくべきことは何か、それが明らかでなくてはならないのである。めざす人間像があり、幼児の発達課題が明らかにされ、生涯教育における幼児期の教育の重要性が認識されてこそ、幼児教育が可能であり、内容や方法の自由がゆるされるのである。

百年の歴史をもつ日本の幼児教育は、私学が非常に多く、統一もなければ、共通理解も少なく、よい意味では、私学の自主性に支えられて存続してきた結果、このような多様化をうみだしたともいえよう。学校教育の中にいれられたとはいえ、設置にあたっての審議には、その内容まで拘束されることは非常に少ないのが現状であり、指導者の幼児教育に対する専門家としての養成が急務である。又最近は、諸外国の幼児教育が紹介され、情報過多の中で、世界の波にまきこまれている感も少なくはない。それだけでなく、有名無名の学者、教育者のイデオロギーによるものから、教育観のはっきりしない企業家による施設等も少なくはなく、選択する両親の幼児教育に対する正しい認識を啓発することが、先決問題であるとも考えられる。いずれにせよ、日本の幼児教育は世界にほこり、世界を指導するに足る状態ではない。多様化の中で混迷の中にあるといってよい。このような時代に、幼児教育の専門家として果すべき役割の重大さを痛感するものである。

（北陸学院短期大学）